地球ミュージアム紀行

性文化の博物館

久保 正敏（くぼ まさとし）
本館文化資源研究センター

セックス・ミュージアム／アメリカ
エロティシズム・ミュージアム／フランス

文化の表象装置のひとつである博物館とその観られ方は、文化を理解する窓口となる。重要な要素であるゆえにないがしろにはできない性をあつかう博物館の調査も、文化を考える方法のひとつに相違ない。こうした視点で、以前に日本の秘宝館調査をしたことがある。神社や寺院に奉納されたり収集されたりした性信仰に結びつくモノを核とする施設、衛生博覧会のように性科学の観点から展示する施設、テーマパーク風に誰でも楽しめる施設、などに大別され、地元の町おこしやイベントと結びついた施設は、観光コースに組み込まれたり、観光ガイドブックに紹介されて外国人観光客が数多く訪れるところもあった。

こうした博物館に関心のあるわたしが最近訪れた、海外の博物館をふたつ紹介しよう。ニューヨークのセックス・ミュージアムとパリのエロティシズム・ミュージアムである。

前者は五番街、後者はムーラン・ルージュのそば、ともに見かけは普通の五階建てビルの全階を占める。いずれも、興味本位の扇情的な展示館ではなく本格的博物館だが、それぞれ展示趣旨が異なるうえ、米と仏の文化の違いを感じさせる点でも面白い。

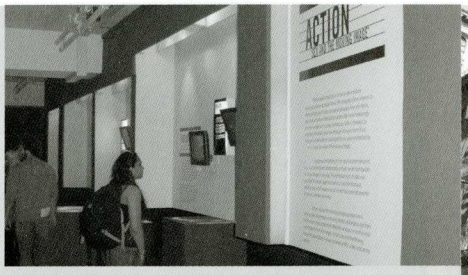
ニューヨークの博物館は、性にかかわるあらゆるアイテムを展示しているが、なかでも、映像産業大国らしく、映像展示が面白い。性にかかわる映像の歴史を一九世紀末から説き起こし、それらが取り上げてきたさまざまな傾向と変化を解説するとともに、時代を画した作品群もビデオ画面で流している。その他、性教育や衛生思想の観点からの教科書なども歴史をおって展示され、見応えがある。

企画展も積極的に催しており、わたしが訪れた二〇〇七年春には、「Erotic Roadmap」が開催されていた。これは、あらゆる性の嗜好の関係図を大パネルで示したうえで、個々の説明を展示したもので、セクソロジー研究にも参考になりそうな意欲的なものであった。ここで関係図を示すのは憚られるが、全体を総括すれば「エロティック方程式：欲望＋障壁＝興奮」が成り立つ、という解説には、なるほどと納得した。

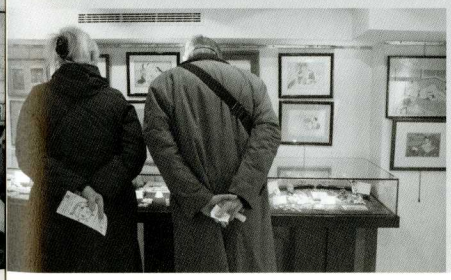
他方、パリのエロティシズム・ミュージアムは、古今の美術・工芸作品を女性美の観点で集めたもので、各種の造形、絵画、凹版や平版の版画、写真、映像、マンガなど諸メディアによる作品が、階段の壁も使って目一杯展示されている。日本の浮世絵などもあり、欧州のエキゾチシズムもこの分野発展に寄与したことを示す。また、写真も含め発明された諸メディアをいち早く使って作家たちが匿名や変名で作品を発表してきたのを見て、ニューメディアの普及を促したのがじつはこのジャンルであったことを、再確認させられた。ただし、各展示間での脈絡は感じられず、歴史的な背景説明も少ない点に不満が残る。純粋にアートとして鑑賞して欲しい、というメッセージなのであろう。

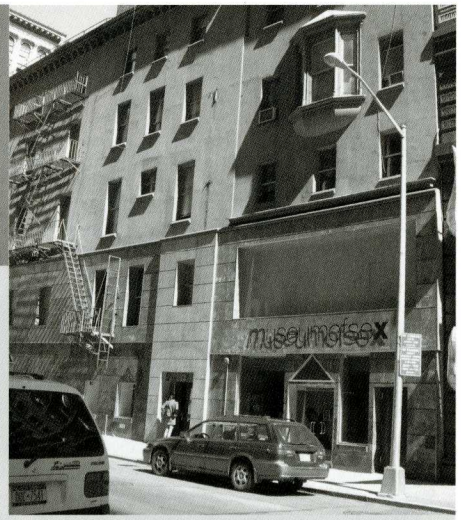
このあたり、やや即物的なニューヨークの博物館的な展示と、美を基本とする美術館的な展示との相違を反映しており、近年議論されている、ふたつの系統の違いを反映している点でも、面白い比較ができるのではなかろうか。

パリのエロティシズム・ミュージアム外観



見応えのある映像展示


浮世絵などに見入る夫婦



ニューヨークのセックス・ミュージアム外観